

78. 草津市矢倉口遺跡

発掘調査略報

はじめに

国道1号線京滋バイパス建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査は、1979年7月より草津市野路小野山遺跡の調査を皮切りに開始され、1980年1月より矢倉口遺跡の調査を実施している。矢倉口遺跡では、これまでにほぼ8,000㎡の調査を終え、多数の遺構・遺物の検出をみている。今回はその中で、高島町鴨遺跡について県内で2ヶ所目の木沓を出土した井戸(SE2)を中心に略報することにした。

1. 遺跡の概要

検出した遺構は、掘立柱建物23棟以上、土塋5基、井戸2基、溝状遺構、溝などで、古墳時代前期から鎌倉時代にまでわたるが、後述するようにその中心的な年代は奈良時代中葉から後葉とみられる。

掘立柱建物 方位より大きく2群に分けられる。N-44°~50°-Wの方位をもつSB1~SB3をA群とし、このうちSB1は2間×2間の長方形を呈し、長軸方向に2本の束柱をもつもので、県内では例を見ない倉庫跡と思われる。B群は、N-10°~18°-Eの方位のもので(SB4~SB23)切り合いなどから、さらに3群以上に分けられる。このうち特に、SB4~SB9の6棟は東側の柱筋を揃え、N-15°-Eを軸に直線に並ぶ倉庫群である。ただし、SB4は1間×1間でやや性格が異なる。これらは、規模形態まで必ずしも一様でないが、一連のものとして意識されることは確実で、公的な性格が指摘しうると思われる。又SB22は低湿地を背後にして、舌状にのびる低台地上に構築された北向きの二面廂の建物で、柱間は2.5mを測る。そしてSB23とともに、L字型配置をなし、井戸、及びその時期にはなかったと思われるSB21付近の広場などと一対をなすものであろう。

土塋 T字型土塋とでも言い表わすべき土塋が数基発見されたが、そのほとんどは出土遺物も少なく、不明瞭な点が多い。プラン検出時に於て、ドーナツ状の褐色堆積土の中央に地山土塊が認められたものの、断面観察では浮いており、ブロック層、及び人為的に埋設された痕跡も認められなかった。SK1・2は共に



T字型を呈すが、他のものと異なり、プラン等明確なものである。須恵質の甕底部、長胴甕、坏身、蓋等、豊富な遺物の出土をみた。又、SK3~5は小型円形土塋であるが、土師器、須恵器等の出土があった。

井戸 SE1、SE2の2基が発見され、共に深さ3.5m前後で残存状態も良く、多くの遺物の出土を見た。SE1は、A地区よりゆるやかに傾斜する低台地の下部にあり、方形素掘りの井戸である。出土遺物は須恵器、土師器の小破片で、時期は今一つ明らかでない。なお、SE2については後に詳述する。

その他、方形周溝状遺構、及び古墳時代前期後半に所属する円形2重周溝状遺構、柵列、溝跡、多数の小型ピットの発見をみた。(平井寿一)

2. SE2とその出土遺物

(1)遺構

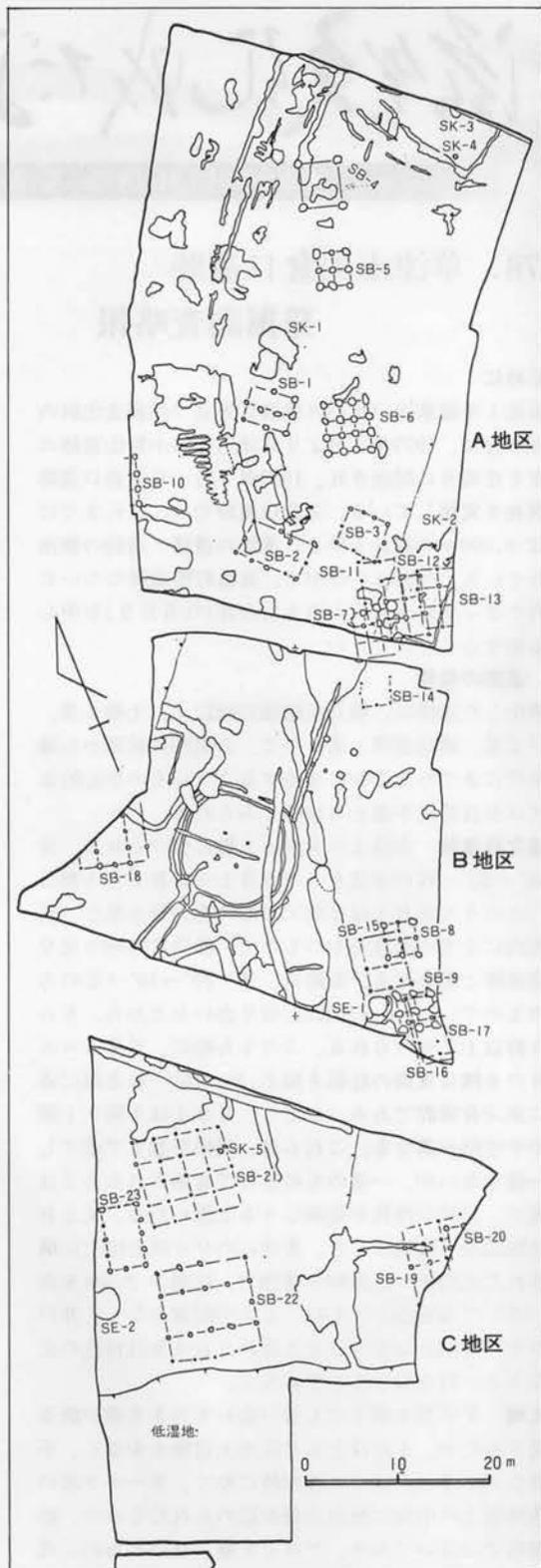
SE2は、C地区東端ほぼ中央部、北西方向へ緩やかに傾斜する低台地上に、密接な関係を推察される2棟の掘立柱建物群の背後に位置している。

構造 深さ3.3mを測る、不整形形状の掘り方はほぼ中央部に手斧痕もあざやかに残る板材をくんだ井戸枠を設けた井戸である。掘り方は深くなるにつれて、しだいに細くなり、底近くでは井戸枠外径よりわずかに大きい程である。これでは板材を底に置くことは不可能であり、板材端部のあたる四ヶ所を特に掘り込んでいる。井戸枠は、前述した様に、一辺80cmの方形横板型木組から成っている。板材は、現状では原位置を保っているもの南北面5段、東西面4段であるが、その他最上段において内側に倒れ込んだもの1段、枠内に落ち込んだ板材4枚が存し、それらを考え合わせるなら

ば、東西面6段、南北面7段、高さ約2mまで井戸枠を復元し得る。板材には端部より15cm程度内側に組み合わせのための柄が切り込まれているが、その柄の数および形から板材は次の3類に大別が可能である。幅5cm、長さ10cmの長方形の柄を上部に2コ切り込んだもの—南北面1段目、同じ柄を上下に4コ切り込んだもの—東西面各1・2段目、南北面2段目、同じ様に4コの柄を切り込むが、内一端の2コが長さ2cm程度の浅いもの—東西面各3・4段目、南北面各3・4・5段目、最上段で内側に倒れ込んだ板材も同様である。要するに、2段目を境にして井戸枠はその組み合わせ方法・厚さに変化を見せるのである。

層位 井戸内の層位は、後の堆積層(I)、井戸崩壊時堆積層(II)、使用時堆積層(III、IV)、さらに井戸枠外層(V)に大別し得る。I層は、レンズ状に堆積した灰褐色系の8層の砂質土層に細分し得る。6層までが遺物包含層であるが、特に多量の遺物を包含していたのは⑤—a層であり、黒色土器甕、土師環、須恵環等が出土している。II層は、⑮層を除いて、すべて青灰色粘土系の堆積であり、層位等から判断しても掘り方くずれによるとおもわれる。遺物包含層は、現存の枠上部を被う様に堆積していた⑮層のみである。同層からは前述した枠板4枚の他、土師甕・横瓶・広口壺、そして幅10cm四方の石塊数個の出土を見ている。III・IV層は井戸使用時における堆積層と考えられ、最も豊富な遺物を包含していた層である。III・IV層の境には、10cm前後の石塊数個が認められた。III層は、植物遺物をかなり包含する暗褐色腐植土層と汚れた青灰色粘土層が交互に重なりあい、9層に細分され得るが、大きくほぼ水平な2層の堆積に分層可能である。同層からは須恵環・土師環等の他、木沓など多数の木製品が出土している。IV層は枠内最下層であり、3層に細分し得る。III層と同じく多くの遺物を包含していたが、そのほとんどが底近くから出土している。特に底(黄灰色砂層)に貼りつく様に残存していた籠断片と曲物断片は注目される。V層は3層に細分され、枠裏込めと考えられる層である。調査時では湧水をほとんど見なかったが、⑳層地山面が大きく抉られており、㉑層との境あたりに当時の湧水最高点を求めることもできよう。

最後に、井戸の年代にふれながらその埋没過程について若干の推測を加えておく。井戸構築時期は不明であるが、廃棄時(8C中葉)をそれほどさかのぼらないであろう。井戸はその後、湧水最高点近くまで埋った時点で、底さらえもされず放棄され、上段枠板材が抜き取られた後は掘り方の崩落によりしだいに崩壊の一途をたどり、8C後半には流れ込んだ堆積土によりほとんど完全に埋まったものと想像される。(大崎隆志)



(2)出土遺物

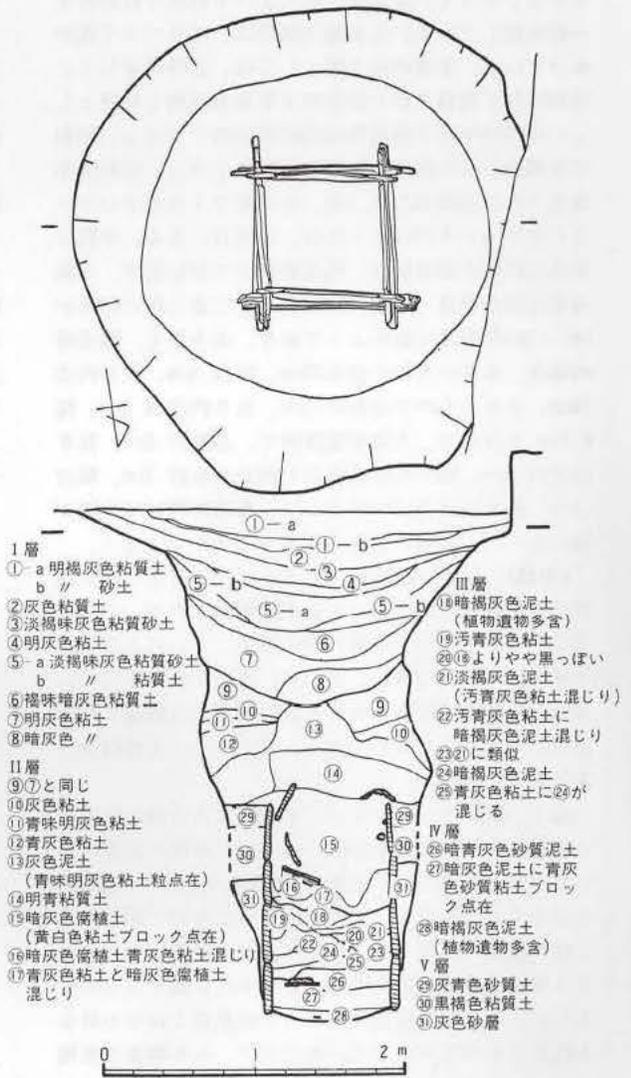
上述のとおり、SE 2は大きく3～4層に区別され第Ⅰ層は廃棄後の、第Ⅱ層は廃棄時の、第Ⅲ・Ⅳ層は廃棄直前の堆積層で、それぞれから須恵器、土師器、緑釉陶器などの土器類のほか木沓など木製品の出土をみた。ここではその一部についてみておきたい。

〈第Ⅰ層〉 1は断面三角形の高台をもつ土師器坏である。平坦な底部にやや内湾気味に大きくひらく口縁をつけたもので、内外面ともナデにより調整している。2はいわゆる内黒の黒色土器塊で、断面三角形の低い高台をつけ、体部は内湾して口縁部を丸くおさめている。口縁部内側に1条の沈線有し、外部上半はナデで調整され、内面は丁寧に横方向のミガキが加えられている。3～5はいずれも黒色土器の甕で、頸部は「く」字に屈曲し、口縁部はやや内湾しつつひらき、端部は肥厚させてやや内側に巻きこむような形をとる。内外面ともナデにより調整している。6・7は緑釉の塊で、6が土師質、7が須恵質である。いずれも体部はゆるやかに内湾しつつひらき、口縁部は外反して、端部を丸くおさめる。6は底部平坦で断面逆台形の大きな高台がつき、外に大きくふんばる。いずれも釉は黄緑色に美しく発色する。これらのうち、1～5は平城宮跡S K 870の出土遺物に類例があり(注1)、おおそ770～780年を中心とする年代が推測される。6・7の緑釉については、現在のところ、良好な類例に恵まれないが、おおそ同時期とみられる。

〈第Ⅱ層〉 須恵器、広口壺、横瓶、各1点を図示した。8は口頸部を欠失しているが、やや大形の広口壺である。やや突出気味の平底で、体部はほぼ直線的に外方にのび、肩部で大きく屈曲する。内外面ともナデで調整し、底部はヘラ切りのあと一部ナデで調整する。9は均整のとれた小形の横瓶である。やや角ばった楕円の体部に、大きく屈曲して外反する口縁部がつく。内外面ともナデにより調整され、一部タタキ目を残している。横瓶の出土は、この時期では珍しいが、広口壺は平城宮跡S D 485に類例がみとめられる(注2)。

S D 485は、724年とされるS D 3035・S D 4951(注3)と、749年とされるS K 820(注4)の中間に位置づけられており、730年代と推測されている。

〈第Ⅲ・Ⅳ層〉 第Ⅲ層からは、須恵器坏1点(10)、土師器塊1点(11)、土師器坏3点(12～14)を図示した。10は断面逆台形の低い高台をもち、ほぼ扁平な底部で、口縁部はやや内湾して、端部は外反して丸くおさめている。11はやや丸味をおびた平底で、口縁部はゆるやかに内湾し、口縁端部を小さく内側に巻きこんでいる。内外面ともナデにより丁寧に調整し、底部は一部ヘラミガキが加えられている。12～14は大小はあるが、ほぼ同じ形態の皿である。平坦な底部と外傾する口縁部



からなり、口縁端部は内側に巻き込むように丸くおさめる。口縁内外面はナデにより調整し、底部はナデおよび丁寧にヘラミガキを施す。内底部に2重のラセン状の暗文(12・13)、口縁内側に1段の放射暗文(12～14)を施す。第Ⅳ層からは、須恵器坏1点(15)、皿1点(16)を図示した。15は10とはほぼ同じ形態で、やや小ぶりである。16は平坦な底部に、短く外傾する口縁部がつき、端部は丸くおさめている。

以上、第Ⅲ、第Ⅳ層出土の遺物は、平城宮跡S K 820出土遺物に類例があり(注5)おおそ8世紀中葉のものとみられる。

〈木沓〉 第Ⅲ層より出土したもので、全長28.6cm、幅7.0cm、長さ内法24.5cmをはかり、一木をくりぬき成形している。先端は流線形に尖っており、縁取りの線刻がみられる。右足用とみられるが、埋没後の土圧で

ややひしゃげているほか、取り上げる時点で右側面が一部欠損している。なお踵の部分は、すりへって底がぬけている。木沓の出土例としては、意外に少なく、昭和27年に発見された奈良県立奈良高校例を初見とし、(注6)昭和53年県下高島郡高島町鴨遺跡で10点(注7)昭和55年調査された高槻市大蔵司遺跡で1点(注8)昭和55年調査された長岡京左京二条二坊六町で1点出土しているだけで(注9)本例は5ヶ所目、14例目に当る。年代は、奈良高校例が奈良後期、鴨遺跡例が9世紀前半、大蔵司遺跡例が奈良～平安、長岡京左京二条二坊六町例が787～788年ではほぼ似かよっており、大きさも、鴨遺跡の場合、大きいもので全長33cm、幅12.5cm、長さ内法24cm、小さいもので全長27.5cm、長さ内法24.5cm、幅8.7cmをはかり、大蔵司遺跡例で、全長27.5cm、長さ内法24.5cm、幅8.7cm、長岡京の例が全長27.7cm、幅12.1cm、長さ内法24.5cmをはかり、本遺跡例はやや幅が狭いものの、普通の大きさと言ふことができよう。

〈小結〉以上、概略述べたように、SE2の出土遺物は廃棄後の堆積とみられる第I層のものが、おおよそ770～780年代に、廃棄直前の堆積とみられる第III、第IV層が750年前後に、それぞれ比定されるもので、8世紀中葉まで使用され、8世紀後葉には廃棄されて埋没したとみられるのである。(大橋信弥)

3. まとめ

以上、概略述べたように、本遺跡は古墳時代前期から鎌倉時代に至る大集落跡であるが、今回の調査において検出した中心的な遺構は、柱筋をそろえ、一定間隔で分布する倉庫群と、木沓を出土した井戸と関連する二棟の建物であろう。これらは、出土遺物よりおおよそ8世紀中葉～後葉を中心とする年代に属するものとみられ、その配置構造からみて一般集落とはやや異なる性格をもつと言えよう。その点で、先年調査を実施

し、岡田駅家に比定された岡田追分遺跡が東側に隣接し、一部で重複する可能性のあることが注意される。(注10)すなわち、この地域は古代東山道と東海道の分岐点として交通上の要衝であり、ここから瀬田の近江国衙にかけては多くの官営工房が分布しているのである。したがって、本遺跡は岡田駅家に関連する、公的な性格をもつものとみられるのである。SE2出土の木沓は、その点を遺物の面から裏付けるものと言えるが、それとともにSE2とも関係深いSB21、SB22の北側を東西流する溝周辺から、土製馬1点の出土がみられることは注目されることである(注11)。先年の岡田追分遺跡の調査では、岡田駅家と断定するには至らなかったが、本調査によって更めて有力化したと言えよう。それらについては、本遺跡の性格付けと合わせて今後の検討をまちたい。(平井寿一・大橋信弥)

註

- (1)奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』VII(1975)、(2)同『平城宮発掘調査報告』VI(1974)、(3)同『昭和41年度平城宮発掘調査概要』(1967)、(4)・(5)注(1)に同じ、(6)田中一郎「奈良高等学校発見の1号丸井戸調査概報」(『奈良文化財研究所学報』3、1955)、(7)丸山竜平・兼康保明他『鴨遺跡』(高島町教育委員会、滋賀県教育委員会、1980)、(8)森田克行「大蔵司遺跡出土の律令祭祀具」(『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第3回)資料』1980)、(9)山中章「長岡京跡左京第51次(7ANESH-4地区)発掘調査概要」(『長岡京』18号、長岡京跡調査研究所1980)、(10)大橋信弥・山口利彦・岸本岳文「岡田追分遺跡発掘調査報告」(『滋賀県文化財調査年報、昭和50年度』滋賀県教育委員会)、(11)小笠原好彦「土馬考」(『物質文化』25)

